
The Romans At The Opera

歌姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Romans At The Opera

【Zコード】

Z4520F

【作者名】

歌姫

【あらすじ】

『オペラ座の怪人』。その悲しそうな運命。「人間見た目が結局9割」的な考えがどうも納得できなくて。。。。。かなりファンタムに肩入れしていますが、どうぞお楽しみください

プロローグ

孤独な私

生れ落ちた瞬間から誰にも愛されることはなく

ただ憎まれ続けた自分。

いつからだらう。

心にまで仮面をつけ始めたのは。

愛されたかった。

ただそれだけだったのだ・・・・・・・・

眼から溢れる熱いものは止まることを知らず、私もまた流れるに任せていた。

「どうして鏡になくなってしまったの?」

つこれハサモドキ語してたね父ちゃん。

いつも優しくこんなことを教えてくれたお父さん。

お父さんが死んだ。

いつまでも泣きじゃくる私をそつと抱きしめてくれたのは親友のメグ。

なんであなたまで泣いてるの。

クリスティーヌが悲しいときは私も悲しいの。

優しいメグ。それを暖かく見守る優しいマダム・ジリー。

泣いたらみんなが困るって知ってるナビ、やつぱり涙は止まらない。

いつまでそうしていたんだろ？

みんなが氣を使って一人にしてくれた。

蠅燭に火を燈し、お父さんに話しかける。

お父さん、どうしてクリスティーヌのところからいなくなつちやつたの。

お父さん、クリスティーヌはまだ知りたいことたくさんあるよ。

ねえ、ねえ、お父さん・・・・・・・・

ふと、思い出した。

死ぬ直前にお父さんが約束してくれたんだっけ。

「私が死んだら、神様に頼んで、音楽の天使をクリスティーヌに送つてあげよう。」

私の代わりに、その方に頼りなさい。」

「音楽の天使」。

その響きは耳に心地よく、幸せを運んでくれそうな気がした。

私は祈った。

早く音楽の天使に会いたい、と。

やつしてこらへり私は眠ってしまったようだつた。

いつの間にかぼんやりと霧の中に私は一人立つていて、どこからか優しい声がした。

「一人ぼっちの孤独な少女よ。

私は音楽の天使だ。君のお父さんに使わされてやつてきた、音楽の天使だよ。」

甘く、柔らかい低い声。ああ、これは夢なんだ。お父さんが送つてくれた夢なんだ。

「君の声は素晴らしい。だが、まだ飛び方を知らない雛鳥のようだ。

私が教えてあげるよ、飛び方を。君に私の音楽を教えてあげよ。」

「私に音楽を教えてくれる?」

「やうやく、君はやがてヨーロッパのプリマドンナになれるよ。

私が歌を教えてあげよう。その綺麗な声がいつそう輝きを放つよう

」。

その声は硬く縮こまつっていた私の心を和らげ、甘く誘つた。

ああ、どうしてこのと聞えるわけがあるの。

他にすぐるものなんてないのに。

それが悲劇への第一歩だと知らなかつたのに。

カーン、カーン……

オペラ座の寮の一日は近くにある教会の鐘の音から始まる。

私、クリスティーヌ・ダーニもその大きな音で「やおうなしへ」を覚ます。

ああ、眠い。あぐびが次から次へと出る。

隣で寝ていたメグ・ジリーも目を覚まし、大あぐびをしながら起き上がった。

「おはよー、メグ。」

「おはよークリスティーヌ。」

私たち二人はそつやつて朝の挨拶をするとふふっと笑って朝食に遅れないように支度をする。

質素な服を着て髪をとかしつければそれで終わり。連れ立つて食堂に行くのが幼いころからの日課だ。

「何かクリスティーヌ眠そうだね。あぐびばっかり。」

「ああ、昨日の夜眠れなかつたの。」

先生のせいで、といつ言葉をかろづじて飲み込んだ。

このことは秘密。

メグにも言えないことなんだから。

食堂からはパンの焼ける香ばしい香りと、食器をならべるせわしこ音が漂ってきて、成長期の少女のお腹をくすぐる。

メグと一緒に席に着き、簡単に食膳の祈りをさわざつから食事を始める。

オムレツ、スープ、ベーコン、そしてロールパン二個。決して豪華じゃないけど、すこしく美味しい。

「とつとう今日はハンニバルの公演だね~」

「あ～そつだねえ・・・うわ、間違えそつ。。。」

「間違えたりなんかしたら、こわいマダム・ジリーにモリモリあいつよー！」

ウインクをして茶目っ氣たつぶりにいうメグ。

マダム・ジリーは彼女のお母さんであり、私のお母さん代わりであり、そして我等のバレエの先生だ。

「マダム・ジリーったら厳しいんだもん。この間なんてちょっと欠伸しただけで怒られちやつた。」

「じゃあ今日はクリスティーヌは全力で欠伸をかみ殺さなきゃね。

「本當よ。それにカルロッタさんにもこらまれたくないし。」

「ああ。あの声をまた聴かなければいけないのね。本当にやせなつちやつわ。

誰か代わりの人はいないのかしら。」

「代理を立てたりなんかしたらカルロッタさんが怒つてオペラ座をつぶしちゃつわよ。」

食堂は笑いで満ち、私の心は幸せでこっこぱー。

お金もや營もいらない。

このままがいい。

そんな小さな願いぐらい神様だって聞いてくれるはず。

・・・それにしても先生、なんでわざわざあの曲を私に練習させているのかしら。

運命の歯車は回り始めたばかり。

オペラ座の新作、『ハンニバル』で私たちは奴隸の少女の役をやる。バレエとコーラスでオペラに迫力をつける役割なのだが、個人として目立たないように、

かつ集団として映えるように演技するのはなかなか難しい。しかし、鎖をがちゃがちゃさせながらぐるりと回ったり、メグと息を合わせて踊るのはすごく楽しいものだった。

「ルイーザ！！今のところ遅れないで！！ナンシー！動きが汚い！クリスティーヌ！もつと集中しなさい！！メグ！いちいち反応するんじゃないの…！」

ひえっ。マダム・ジリーはプライベートだと優しいけど、練習のときはめちゃくちゃ厳しい。

おっとここは一人でターンして……

そろそろカルロッタさんのソロが入るんじゃないかな～

「このトロフィー！輝かしきヒーロー！ もはや影もなきローマ！」私たちの救い主 私たちの命の恩人！私たちをローマの圧制から救つてくれた！」

さあ、私たちのコーラス。深く息を吸つて息を歌に変えていく。

「ござ歌え踊れよ かの人たたえいざ讃れたたえよ 彼らが強者つわもの
歌い踊りもてなそう・・・私たちに救いをもたらした 勝利の軍団
を迎えるよ」

地響きのような「一ラスとキーキーした・・・おつと失礼、カルロ
ツタさんの声。

なんだかひどくミスマッチ。

変なの。

そう思つてるのは私だけじゃないみたい。

メグも、マダム・ジリーも・・・先生も。
もちろん私みたいな孤児がそんなこと思つたって何にもならないん
だけど。

踊り

歌い

その繰り返しの中でおペラがいよいよ熱を帯びて来たときだつた。
ふいに4人の男性が楽屋の方から入つてきた。

「みなさん、重要なお知らせがあります！！」

そのうちな一人 オペラ座の支配人であるルフューベルさんは、声
を張り上げてそう言つた。

楽団長は音楽を止められたことで、かなりむづとした顔をした。

「今見ての通り、リハーサル中何ですがね。」

「ああ、すまない、すまない。しかし、とても重大な、今しか話せないことなん

だよ。みなさん、集まつて下さい。」

今しか話せない重大な話?

私とメグは顔を見合させて中央に向かった。

「短刀直入に申し上げます。

私は今日この瞬間をもつてオペラ座の支配人を辞めさせていただきます。」

うつ、うつそー？！

「私の後はこのフィルマンくんとアンドレくんがやってくれます。2人ともくず

鉄産業で…失礼、スクラップメタル産業で…活躍中のやり手でいらっしゃる。」

「まあ…！…何てこと…！…長年オペラ座の支配人を勤めたあなたが辞めるなんて…！…！…ま

さにオペラ座の恥…！…理由をお聞かせ願いたいわっ…！」

イタリア訛りでまくしたてるカルロッタさんに苦笑しながらルフェーベルさんは一言小さくつぶやいた。

「怪人にもあなたにも疲れたんですよ。」

ほんの小さな声だったけど、私とメグにははつきり聞こえた。

確かに最近変な事件が続いているのだ。バレリーナたちはそれを「

怪人」の仕業

とし、支配人としてルフェーベルさんは対策に追われていた。

しかし・・・彼がやめてしまつなんて。

場がずーんと重くなつたとき、ふいに甘いテノールの声が聞こえてきた。

「僕は紹介して下さらないんでしょうかね、ルフェーベルさん」

いたずらっぽいその声に管理人はびっくりしたような顔をして慌てて招きよせた。

「これは失礼、子爵。こちら、ラウル・子爵。新しいオペラ座のパトロンだ。」

ラウル？

聞いたことがあるような…

思わず声の主を見ると、

思わず息を飲んだ。

彼は私の幼なじみ。まだ父が生きていたあの頃、よく一緒に遊んだ。

彼はいわゆるボンボンで、私も村の子供たちと一緒になつてよけいじめた。

あのラウル。

「どうしたのクリスティーヌ？顔が真っ青よ？」

「あのパトロン……知り合いかも…。」

「うそお！…もしかして幼い恋人だつたとか？」

「ないない。よくいじめてた。帽子を奪つて、高い木とかの上に私は登つて、

『悔しかつたらここまでおいでの』とかやつたり。
泣き虫で、すぐビービー泣いたから私はよく怒られて、仲直りとか
いつて古い物語を一人で
聞かされたりしてた。』

「クリスティーヌ…かなり悪かつたんだね…」

「えへへ。あの頃のこと、根に持つてないと良いんだけど。」

「でもかなりハンサムね。玉の輿誰か狙うんじやない？」

「げー。そういうのって何かやだ？」

私たちがあーだこーだとそんな他愛もない話で盛り上がりしている中、

幹部たちは互いを紹介しあい、プリマドンナを説き伏せて、（おまけにラウル子爵はプリマドンナにサー・ビスウインクなんかしきりつて…）まずは一段落ついた。

先ほどから早く練習を再開したくていざして、いた楽団長はいつ切り出した。

「ではどうぞ。せっかくなのですから御三方にプリマドンナのリアを聞いて
いただぐのは。」

「おお、それは嬉しい。なあ、アンダレくん。」

「まつたくだ、フィルマンくん。カルロッタさん、お願ひであります
か？」

「何言つてゐるよ…今回的新作にはまともなアリアがぜんぜんな
いじやないの…！」

ダンスやコーラス中心で、何のために私はいるわけよつ………」

ありやじや。また短気なプリマドンナ怒りやせつた。

楽団長は一生懸命笑顔を作つてなだめにかかった。

「あるじゃないですか、3幕のあの、見事なアリア『トニコック
of mœ』が。」

「あれは素晴らしいアリアだ。プリマドンナにふさわしい。」

ルフ＝ベルさんも「とにかくに樂團長に加勢する。

「や、そつかしら。」

短氣であると同時に単純なカルロッタさんは急にこりこりして咳払いをした。

「ではお願ひしますよ……」

樂團長の指揮に合わせてピアノが前奏を奏で、歌が始まる・・・

「私を想つて。優しく想い出して、”さよなら”を言った　あの時を

私を思い出して。時々でいいから　私のことを想つて、お願い。そういう約束して。

いつか　思い直す時が・・・キャー！――！」

突然、背景が歌っているカルロッタさんの皿の前に落ちてきた。

「おこ……道具係はびりした……」

「（「）めんなさこ……おらがちよつと離れた隙に……」

道具係のせいじゃない？！

「か、怪人の仕業よ。」

「そうだわ、きっと。」

バレリーナたちはみなおびえ、カルロッタさんは真っ青になつて言った。

「もう我慢できないうわ……」の間から私を狙つたとしか思えない

事件がたくさん！！

「…今田のオペラは丑いわ…」

そう言い放つと、彼女はドレスをばたばたと引きずりながら走って
いつてしまった。

「じゃあいいよ。わづ今夜のオペラは中止か?」

「いやほんと参ったど、ハーフヤング」

「プリマドンナの機嫌は直せないのかね？」

「理でしょ。もう止めるしか……」

「代理は立てないのでですか？」

彼女の代理なんて

「いまと。

突然、マダム・ジリーが口を開いた。

「マダム、それは誰でしょう。」

「クリスティーヌ・ダーウィです。」

え？

その場にいた全員が固まつた。

私??????

「ゴーラスガールに歌わせるのですか？」

「彼女は特別な先生についています。」

「その方のお名前は？」

「わけあつて申せませんが……とにかく彼女の歌を聴けば」理解
いただけるかと。」

みんなの視線が一斉に私に集まる。

嘘でしょ？

「さあ、歌つて。」

ピアノが流れ、私は歌い始めた。

恋に悩む女性となつて

歌つているうちに私は自由になり、歌は羽をつけて羽ばたいた・・・

「見事だ。」

「彼女に決定だ。」

誰も知らなかつた。

彼女の歌を地下で満足げに聴いている者がいようとは。

マダム・ジリー以外、誰も。

#4 (後書き)

短くてすみません(汗

「私を想つて。優しく想い出して、”さよなら”を言った　あの時を
私を思い出して。時々でいいから　私のことを想つてお願いそう約束して
いつか　思い直す時が・・・キャー！――！」

突然、背景が歌っているカルロッタさんの皿の前に落ちてきた。

「おー！…道具係はびりした…！」

「『』、『めんなさ』……おらがちよつと離れた隙に・・・・・」

道具係のせいじゃない？！

「か、怪人の仕業よ。」

「そうだわ、きっと。」

バレリーナたちはみなおびえ、カルロッタさんは真っ青になつて言った。

「もう我慢できなーいわ！――」の間から私を狙つたとしか思えない

事件がたくさん！－

「もひ・・・もひ・・・・今日のオペラには出ないわ－－－－－－－－－－－－－－

そう言い放つと、彼女はドレスをぱたぱたと引きずりながら走つて
いつてしまつた。

「どうしよう。 もう今夜のオペラは中止か？」

「こやはせや、参つたどうしよう。」

「プリマドンナの機嫌は直せないのかね？」

「無理でしょ。 もう中止にするしか・・・・

「代理は立てないのですか？」

「いや、彼女の代理なんて・・・・

「こます。」

突然、マダム・ジリーが口を開いた。

「マダム、それは誰でしょう。」

「クリスティーヌ・ダーエです。」

え？

その場にいた全員が固まつた。

私？？？？？

「ゴーラスガールに歌わせるのですか？」

「彼女は特別な先生についています。」

「その方のお名前は？」

「わけあって申せませんが・・・とにかく彼女の歌を聴けば」理解
いただけるかと。」

みんなの視線が一斉に私に集まる。

嘘でしょ？私なんかができるわけないのに・・・

躊躇する私をマダム・ジリーは優しく前に押し出して言った。

「さあ、歌つて。の方もきっと喜んでくださるわ。」

先生。

ピアノが流れ、私は歌い始めた。

先生聞いてください。

私の歌を。

あなたの愛弟子の歌を。

- ・ 歌つているうちに私は自由になり、歌は羽をつけて羽ばたいた・・・

「見事だ。」

「彼女に決定だ。」

誰も知らなかつた。

彼女の歌を地下で満足げに聴いている者がいようとは。

マダム・ジリー以外、誰も。

「まさか・・・あれはクリスティーヌ?―」

「一回の特等席でオペラを鑑賞していたオペラ座のパトロン…ラウルは、第三幕のアリアを歌っている女性に気づいた。

「何でことだ。僕の初恋の女性がオペラ座で歌っているなんて!! プリマドンナの代理として!―」これは運命だ!! そうに違いない!! !! オペラが終わり次第クリスティーヌを食事に誘おつ!! !! 「..

クリスティーヌにそんな気がこれっぽっちもないことを知らない子爵は、夢見心地で彼女のアリアを聴いていた。

「私たちは誓つていない。愛は永遠で海のように変わらないなんて。

でも私に約束して、時々でいいの私を思い出して・・・

「この私を・・・」

クリスティーヌの歌声は清らかに美しい、オペラ座全体に響き渡つた。

そしてそれに答えるかのように、聴衆の喝采が彼女に送られた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

何て素晴らしいの！――

歌い終わった私は何百もの人に拍手を送られて、これ以上ない幸せに満ち溢れていた。

たくさんの人から愛されるのがこんなに幸せないとだなんて、思つてもみなかつた。

お父さんのところに行かなくちゃ。

オペラが終わるとそつと劇場を抜け出して、父の遺影が飾られている部屋に行つた。

蠅燭を燈し、祈る。

不意に蠅燭がゆらりと動き、私に彼が来たことを知らせた。

「素晴らしい、クリスティーヌ。」

「先生・・・・・」

全部、全部先生のおかげ。

そう思つて一人涙ぐんでいると、廊下がにわかに騒がしくなつた。

「クリスティーヌ～？」

慌てて涙を拭うと、ドアからぴょいと彼女が顔を出した。

「全く、どこの世界に隠れちゃったのかと思ったよ～

お疲れ、クリスティーヌ

今日のステージすっごく良かつたよ……いつの間にって感じだった！！

ね、『特別な先生』って誰のこと？？？

すじこマシンガントーク。

豊かな金髪をきらきらさせて、大きな縁の瞳をいっぱいに開いて、いろんなことを残らず知りうとして。

この天才ダンサーは引っ込みがちな私についても新しいものを見てくれた。

だから。

この子になら・・・いいかもしない。お母さんだって知ってるんだし。

「私の先生はね、お父さんが送つてくれた天使なの。」

「は？またクリスティーヌつたらそんな夢みたいなこと言つちやつて。」

「父は死ぬ間際に私に約束してくれたのよ。天国に行つたら、音楽の天使を送つてあげよつて。その日、私は本当に音楽の天使に出会つたのよ。」

「彼はいつも私にレッスンをしてくれて・・・今この部屋にもいるわ。私にはわかるの。」

「眼を覚ましてよ。そんな御伽噺みたいな話、あるわけないよーー！ねえ、手が冷たいよ。」

「彼はいるのよ。」

「顔だつて蒼いし。」

「だつて私はそつじやなきや一人・・・」

「私がいるでしょ？何をおびえているの！－ね、部屋に戻らう。みんな待つてるよ。」

メグは私をぎゅっと抱きしめてくれた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

部屋に戻ると、花束や、プレゼントで溢れかえっていた。

こんなにじつじよつてこりくら。

・・・誰じやー。

「どなたですか?」

「ちゅうと入りますよ。」

嫌な予感。

ナーナーへこやな予感。

この滑らかで綺麗なほくちんかつ　じいじせきな声。

「ラウル・・・・

「久しぶりだね、クリスティーヌ……ずっと君に会いたかったんだ！……」

満面の笑顔には裏はないさうだ。とりあえずいじめの記憶はないつてことで。

「お、オペラ座のパトロンになつたんだってね。おめでとう。」

「ありがとう~ ね、今日一緒にディナーしないかい? 馬車なら待たせてあるよ……」

「は?」

「じゃあ、5分で準備してね~迎えにくるから……」

「うふ、うふっと待て……」

あ~ひとつ浮かれて行つちやつた。

やだな~ラウルとディナーとか。
最悪。

でもパトロンに逆らつたらまずいのかな。

あ～あいつのせいだ氣分ぶち壊し。

「私の宝物に手を出す愚か者め。そりやつて自分の栄華に浸つていればいい。若輩者がいい気になりおつて。私のオペラ座を奪えるとでも思ったのか。」

突然聞こえてきた、心を震わすようなテノール。

こんなに豊かな声量と魅力的な声の持ち主はこの世で一人しかいな
いだろ？。

「せ、先生！…」

「可愛い私のクリスティーヌ、今日のオペラは見事だつたぞ。」

「全て先生のおかげです！－何でお礼を申し上げたら良いか……」

「私はお前の能力を引き延ばしただけだ。それより、幹部が交代して早々にお前は大成功を収めたのだ。プリマドンナになれるかもしれないぞ。あのへたくそなイタリア女の代わりにな。」

「そんな…私にそんな大層なこと…」

「お前と私なら出来るわ。

さあ、今夜はちょっとした祝いをしようかと思つたんだが…ラウル子爵様とのデートの方が良いかな？」

「ま、まさか！！先生にお祝いしていただけるなんて、最高です！相手が子爵だらうが公爵だらうが先生のほうがずっとといいです！…！」

だつて、先生に会つてみたい。

私は先生の姿を一度も見たことがないのだ。14年もレッスンを受けていながら。

「本当に面白い子だ。良いだらう。鏡の中の自分自身を見てみなさい。そこに私は居る・・・・・・」

目の前の大好きな姿見。そこには自分を見つめる私の姿・・・・・・

そして、顔を半分仮面で覆つた、一人の男の姿が映つていた。

驚いて部屋の中を見回しても、そこには誰も居ない。

黒い燕尾服に身を包み、漆黒の髪をなでつけた彼こそ、私の音楽の天使、Angel of music・・・・・・

「その鏡は扉になつてゐる。さあ、おいで。

二人だけの音楽の世界に・・・・・・

その深く甘い声に酔つたように、私は隠し扉の鏡の向いの世界に足を踏み入れた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ん

クリスティーヌとデート

着替えを済ませた僕はクリスティーヌの部屋に小踊りしながら足を運んだ。

どんな服かな。

セクシーなタイトかな。

それとも清純なプリンセスかな。

色は何色かな。

ピンクかな。

でも彼女は赤も似合つな。

いやいや、寒色系も素敵だろ?」な。

小さい頃こそいじめられっ子だったが、数年前頃から僕に近づく女性が多くなった。

美形で、お金があつて、けつこう優しい。

僕の定評はそんなところだ。

この数年間、僕の甘い誘いを断れる女性はいなかつた。魅力的なワインクの仕方からキスのタイミングまで熟知している僕だから。

クリスティーヌもきつと今夜から僕にメロメロさう。

や
や

そんなことを考えて緩んだ口元を締めてから、ドアノブをじりじりと叩いた。

「クリスティーヌ、準備は出来たかい?」

「ええ。」

微笑みながら現れる彼女の腕をとり、馬車の所へ……

そんな妄想は打ち砕かれた。

「先生……せひ……ええ、もちろん……」

綺麗なクリスティーヌの声が語りかけてる相手は僕じゃない。

「先生」って誰だ？！

しかしどんなに耳を澄ませても、不思議なことに相手の声は聞こえない。

「クリスティーヌ！－！誰と一緒になんだ！－！」

ドアノブをガチャガチャと回すが、鍵がかかっているようで開かない。

「くそつ！クリスティーヌ！答えてくれ！クリスティーヌ！」

ラウルの叫びは彼女には届かなかつた。

全てを見守るのはただ一人・・・・・・

マダム・ジリーのみ。

何本ものわらべすべくに溜らされた長い廊下。私は彼に導かれ、夢見心地で歩いていた。

どこに行くかも、何が起るのかもわからないけど、先生と一緒にいれば大丈夫。根拠のない、確信のようなものがあった。

廊下は階段になり、それを下ると馬が一頭繋いであった。

「乗りなさい。」

私だけ乗ることにためらうと、先生は私をそつと抱き上げて馬に乗せた。

彼が轡を引いて殺風景な道を行く。

誰もいない。

ところどころに燭台があり、道を微かに照らしている。

幻想的といえば聞こえはいいけれど、正直怖い。

「オペラ座の地下だ。」

一人の声と、足音だけが響き、静寂を更に濃くする。
その先には湖のようなところがあり、馬から下りて船に乗つて進んだ。

建物の中なのに何で不思議なところなんだろう。

「この人は…何なのだろう…」

「怖がるな。私はお前の音楽の天使なのだから。」

私の心を見透かしたように微笑む彼の声に私の吐息が重なつて。

一人のデュエットはいくつもの響きを生み出し、私の心には彼が住み着いて、まるで一つとなつたよう。

るつやくがいくつも水面に浮かび、霧のなか、舟は進み、白い壁に突き当たった。

彼がにわかに壁に手を触れて、何か咳く。

と。

「魔法？！」

壁の真ん中が重たげな音を立てて開き、壁は門へと変わった。

「驚いただろ？」

この門には水力を使つて いるんだ。

魔法なんて得体の知れないものじゃない。理論的にきちんと説明のできる仕組みを使つて いるんだよ。私はこういった発明をするのがちょっとした趣味なんだ。」

発明が趣味・・・・

どんだけこの人はぶつとんでるんだ。

門を抜けると、そこにはもう水はなく、代わりに煌めくたくさんの宝飾品や、実験に使うような小難しい道具、分厚い本や楽譜が雑然と、しかしある秩序をもつて並んでいた。

「私の音楽の世界へようこそ。」

彼に支えてもうつて舟を出る。

ここは美しい彼の世界・・・・

「私が今夜お前をここに連れてきたのは、一つの理由がある。

無論、オペラ座デビューの祝いのためもあるが、もう一つ大きな
訳があるので・・・・・

ステージで歌つお前の声を聴いたとき、私は本当に感動した。

そして、思った。

お前となら、私の音楽の世界を完成できる、じ。

今この世界ではび「」つている『音楽』とは、上流階級の貴族にちやほやされるだけのお飾りに過ぎない。オペラだって一種の社交のようだものだ。

このオペラ座も例外ではない。

表面だけ飾り立てて、豪華な演出をしていても、今のオペラ座の音樂は死んでいる。

クリスティーヌ。

お前の力が必要なのだ。

お前と私となら人の心を動かすような音楽を創れる。

貧しい者、疲れた者もふと涙を流してしまつような本物の音楽を一人で創らないか。

本当に美しい音楽を創りつではないか。

私の愛弟子よ。」

息が止まつそうだった。

あまりにも大きな話をされて。

おまけに彼は私に見せたいものがあるといった。

それは

ウエディングドレスを着た、私そつくりの蠍人形だった。

それを見た瞬間、私の意識は途切れた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

いきなり驚かせてすまなかつたな。

急に失神したクリスティーヌを抱きとめた男は呟いた。

私だつて恋ぐらいするのだ。

ふつと自嘲気味に息を吐いてから、彼はクリスティーヌをベッドに寝かせ、囁いた。

手伝ってくれ、クリスティーヌ。

私の音楽の世界を完成させるのを。

#7 (後書き)

なんか先生が変態チックですね（笑）

試験終わりました！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4520f/>

The Romans At The Opera

2010年11月24日06時39分発行